

川端文学における匂いの世界

— 『油』を中心に—

愈 載 信*

目 次

- 一 はじめに
 - 二 自己回復・自己浄化の物語
 - 三 媒介としての油
 - 四 川端文学における匂いの世界
 - 五 おわりに
-

—あらゆるものがみな煙であったなら、嗅孔はすべてを認識するであろう。(ヘラクレイトス)
—私の天才のすべては私の嗅孔にある。(ニーチェ)

一 はじめに

物の形体や事柄・感情などを客観的に表現する描写は、近代文学において欠かせない表現記法であり、文芸的エレメントでもあるが、特に視覚的描写では大きい成果を上げてきたと思われる。色彩、陰影、形、構図など、絵画に匹敵するほどの多様な視覚の世界が多くの作家によって描かれてきた。視覚的描写には及ばないが、音、声のような聴覚的描写も広く用いられている。例えばよく使われる擬声語、擬態語もその中の一つである。そしてこのような記法は近代文学においてより強烈で豊かなイメージの世界をも作り上げてきた。

それに比べれば、嗅覚的描写はあまり見られない。匂いの世界に興味を示す作家も少なければ、嗅覚的描写自体が珍しい方である。近代文学研究においてもそれは同様である。匂いの世界に注

* 忠南大学校 日語日文学科講師、日本近代文学

目した研究は稀であり、この分野はまだ未開拓に近いと言える。

近年になって匂いの世界に注目したのは吉本隆明である。彼は『匂いを読む』¹⁾の中で「匂ひ」という古語から、社会・精神・宗教など、多方面において匂いの世界を考察したが、その中で日本近代文学における芥川龍之介と夏目漱石について、次のように述べている。「芥川龍之介の師にあたる漱石も匂いの表出に執着をしめして、この漱石—龍之介—堀辰雄—立原道造の山脈を、匂いの文学の系譜とでも呼びたいところがある。そして、それぞれの嗅覚に固執する根拠は、微妙にちがっている」。これは近代文学と匂いの世界に着目した数少ない考察の一つである。

しかし、この「匂いの表出に執着をしめしている」という点においては、川端康成も決して劣っていないと思う。むしろ川端は匂いの世界に誰よりも敏感であって、その特質を誰よりも豊かに表現した作家の一人であった。官能を表す匂い、自意識を表す匂い、言葉として形をなす前の記憶を想起させる匂いなど、作品の中で漂い広がっていく匂いの世界は、身体に備わっている感覚を越えて、文学的美的世界をも織り成しているからである。

しかしながら、川端文学研究において匂いの世界についての先行研究は皆無である。本稿では『油』を一つの作品として捉えながらも、匂いの世界に着目し、川端文学における匂いの世界について考察したい。それは荒蕪地に近い川端文学における匂いの世界の分析であり、川端文学の特徴をも明らかにする、新しい試みでもある。『油』は、川端文学の匂いの世界においては決して欠かせない作品である。匂いの世界が微妙な陰影を投げながら、作品のテーマや構成に密接にかかわっている代表的な作品であるからである。

『油』は1921年7月号の「新思潮」に発表されたが、のち1925年10月号の「婦人之友」に本文を縦横に加筆訂正した上で再掲載された。これが現在見られる『油』の本文である。はじめは「掌の小説」に分類されたが、十六卷本全集（新潮社、1948年5月）以来、著者はこの作品を短編小説として扱っている。

この作品は『僕の標本室』（新潮社、1930年4月）に初めて収められ、十数種の全集叢書などに収められているものの、川端文学において主要作品として認識されているとはいいがたい。その扱いの多くは、伝記的研究の資料として、あるいは他作品の解釈、研究の際の作家川端の生い立ち（孤児体験）などを明かす手がかりとして採用されてきた。羽鳥徹哉²⁾の『川端康成の基底』や、林武志³⁾の『鑑賞日本近代文学⑮川端康成』などがその例で、作品そのものについての言及は僅少と言わざるを得ない。

作品論的に独立した論考は比較的近年に至って現れているが、その数も少ない。森安理文⁴⁾は「油—悲しみの追憶から哀しみへの変身」において、川端が私的体験としての悲しみを、文学的

1) 吉本隆明『匂いを読む』（光芒社、1999年4月）p 43、p 44

2) 羽鳥徹哉『川端康成の基底』（教育出版センター、1979年1月）p 141-162

3) 林武志『鑑賞日本近代文学⑮川端康成』（角川書店、1982年11月）p 7-10

4) 森安理文「油—悲しみの追憶から哀しみへの変身」（『川端康成 ほろびの文学』国書刊行会、1993年10月）p 11-20

に造形された哀しみに転化させることに成功したと評価しており、太田鈴子⁵⁾の「川端康成の新感覚『油』『葬式の名人』『孤児の感情』に関して」は、感情による記憶を重要視して現実を認識するという方法によって展開されたと述べている。そして福田淳子⁶⁾は従来の自伝的資料としての取り扱いを離れ、創作としての作品の意味を、加筆訂正の効果を通じて論じようとした。これを受けた形で、岡本和宣⁷⁾は「川端康成『油』試論—本文の異同をめぐって—」で、改稿の部分をもっと具体的に指摘しながら、『油』を「母への思慕」を述べた作品であるとも語っている。そして金順熙⁸⁾「川端康成『油』論—記憶を作る物語—」も、『油』を創作として見る立場をとり、過去の空白を伯母の話を中心に満たしていく過程を通じて、「『孤児根性』と云う観念から解放される物語を〈私〉は紡ぎだしていく」と述べている。

「孤児としての私の私小説と見るべき」とも、「大方つくりごとである」という作者自解⁹⁾は、すでに作品の両犠牲を語っている。この作品を創作(つくりごと)として捉える視点は、作品論的視座の必然性にもあるだろう。しかし、作品を創作として読んでいくならば、本文異同の過程や文学的造形の考察、記憶の復元および総合などにおいても、今までの作品理解や解説から進んで、より多様な読みの可能性が展開されるべきであると思う。ここでは『油』を一つの作品として分析しながら、今まで論じられたことのない匂いに注目して、『油』における匂いの世界と作品における重要モチーフ、つまり記憶と孤児とのかかわりを考察していきたい。この作業を通じて独自の匂いの文学を形成した川端文学の意味も説明できると思う。

二 自己回復・自己浄化の物語

幼い時両親を失って、両親のことは何一つ覚えていない〈私〉は、少年時代に孤児の悲哀を悲しんだが、間もなく、自分には孤児の悲哀を分かるはずがないと、〈感情の因習や物語の模倣で悲しむものか〉と意地を張っていた。しかし、それが却って自分をいびつなものにしていることに気づき、〈二十歳の私〉は孤児根性を反省しなければいけないのだと、人生の明るい広場へ出て来た。

そんな時、十何年振りで会った伯母に昔の話を聞く。父母の葬式で私が仏前の鉦の音を嫌がり、灯明を消させ、かわらけの油を流させたという話である。この話は不思議な働きをした。仏壇に礼拝する度毎に、灯心の灯を蝋燭に変えた祖父のことや、菜種油の臭いのする物を口に入れると吐く自身のことなど、脈絡もなく記憶していた事柄に筋道がつき、自分のうちに深く刻み込んだ悲しみを知

5) 太田鈴子「川端康成の新感覚『油』『葬式の名人』『孤児の感情』に関して」(『学苑』1995年1月) p 52-60

6) 福田淳子「『油』論」(『川端文学への視界』教育出版センター、1996年6月) p 5-18

7) 岡本和宣「川端康成『油』試論—本文異同をめぐって—」(『皇学館論叢』1996年6月) p 19-36

8) 金順熙「川端康成『油』論—記憶を作る物語—」(『川端文学への視界』銀の鈴社、2004年6月) p 8-20

9) 川端康成「あとがき」(十六巻本『川端康成全集第二巻』新潮社、1947年8月)、「独影自命」(三十五巻本『川端康成全集第三十三巻』新潮社、1982年5月) p 293、295

るのだった。また度々夢見る、竹刀で灯のついたかわらけを打ち下ろす夢も、父母の死で受けた痛みだったのだと認識し、助かったと自覚する。ために菜種油臭いものを食べてみたが、食べられるようになる。そして肉親に死別したことからくる心のゆがみは、油嫌いから逃げられたように、ちょっとした機会でも、克服出来るかもしれないと思う。しかも油臭いものを採る度に、〈私〉の身が肉親達に守護されているような気さえる。

以上が時間の流れに沿った『油』のあらすじである。簡単に言って、この物語は〈私〉が伯母の話を通じて失っていた記憶を総合・復元し、孤児の悲哀として自分のうちに染み込んだ油嫌いを自覚・克服したという話である。表面的には油嫌いの克服であるが、その裏面には自己回復・自己浄化のテーマが存在している。これから〈私〉の自己回復・自己浄化の内実を具体的に分析してみよう。

〈私〉は何を失い、何を回復したのか。最初に挙げられるのは肉親の喪失である。「父は私の三歳の時死に、翌年母が死んだ。「父母の死の三四年後に祖母が死んだ」、「またその三四年後に姉が死んだ」。そして「祖父も死んでから十年近くなる」。

しかし、〈私〉にとって問題となるのは、孤児であるということより、両親に対する記憶を持っていないということである。『油』の冒頭が「父は私の三歳の時死に、翌年母が死んだので、両親のことは何一つ覚えておかない」（強調点筆者、以下同じ）という文章であるのは意味深い。この「何一つ覚えておかない」ことから〈私〉と父母の話が始まるからである。〈私〉にとって、父母に対する記憶を持っていないということは、〈私〉と父母とをつなぐ絆を失っていることにもなる。〈私〉は「写真を見たとて何も思ひ出すことがないから、これが自分の父だと想像しても実感が伴はない」し、「父や母の話をいろんな人から聞かされても、親しい人の噂といふ気が矢張りしないので、直ぐ忘れてしまふ」とも説明している。父母が死んでいても、もし、父母に対する記憶を持っていたならば、その記憶が父母との絆を想起させるだろう。しかし、記憶を失っている〈私〉は、父母と何のかかわりも実感できないし、血縁という〈私〉自身の起源をたどることもできない。したがって記憶の喪失は父母との関係の喪失をも意味する。

〈私〉は父母の存在の喪失は勿論、父母との関係も喪失していたが、それを強く自覚する。そしてそれはアイデンティティー (identity) がいないことへの不安にもつながっている。〈私〉は、「孤児の悲哀が何物だか少しも分つておかない、と言ふよりも、分るはずがないのだと省るやうになり」、「それから顔も知らない父母の死のために流す甘い涙は幼稚な感傷の遊戯なのだ」とも思う。父母との関係の喪失を強く意識すればするほど、「感情の因習や物語の模倣で悲しむものかと思」うが、それは歪んだ性格を生んだ。

しかし、さした意気張りが却つて私をいびつなものにしてゐることを、高等学校の寄宿寮で私の生活が自由にのびのびとして来た頃から気づき初めた。さした心が私の心の傷や弱身を意固地にかばふはうにばかり働いてゐたのだ。悲しむべきを素直に悲しみ、寂しむべきを素直に寂しみ、その素直さを通してその悲しみや寂しみを癒すことの邪魔をしてゐたのだ。前々から私は、明らかに幼い時から

肉親の愛を受けないことに原因してゐる恥づべき心や行を認めて人生が真暗になることが度々ある。そんな場合、「ええい。」と投げ出したくなる心持を殺し、静かに自分を哀むやうに傾いて来た。劇場や公園やいろんな場所で幸福な家庭の親兄弟に連れられた子供とか、子供らしい子供同士でゐるとともに、何気なく見惚れ、見惚れてゐる自分を見出してほろりとし、ほろりとする自分を見出して、「馬鹿。」と叱ることがあつた。しかし、その叱る自分がいけないのだと思ふやうになつた。

この文章は孤独な〈私〉の自己反省であると同時に、否定的自我の形成過程でもある。悪循環のような自己認識は歪んだ自我になつたのである。〈私〉自身はそれを「意気張り」とも「孤児根性」とも呼んでいる。しかし、「さうした意気張りが却つて私をいびつなものにしてゐること」に気づき始める。そして「死んだ肉親なぞにはこたはらなくなければいいのだ。孤児根性が自分にあるなぞと反省しなければいいのだ」と、〈私〉は自らの癒しの方法を見出す。

「まことに美しい魂を自分は持つてゐる。」

ひそかに抱いてゐるこの気持を余計な反省の蔭にいちけさせずに、野方図に青空へ解放してやればいいのだ。こんな風な気持で二十歳の私は人生の明るい広場へ出て来た。幸福に近づきつつあるやうな気がして来た。ちよつとした幸福にも我ながら呆れるほど有頂天になるやうになつてきた。私は自分に問ふのだ。

「これでいいのか。」

「幼少年時代を幼少年らしく過ぎなかつたのだから、今は子供のやうに喜んでよろしい。」

かう答へて自分を見逃してやるのだ。やがて来る素晴らしい幸福一つで、私は孤児根性からすつかり洗はれさうにさへ思へる。永い病院生活を逃れた予後の人が初めて目にする緑の野のやうに、その時は人生が見えるだらうと待ち遠しい。

作家論的論証は避けたいが、ここで少しこの背景に触れておく必要もあるだろう。「幸福に近づきつつあるやうな」、「ちよつとした幸福にも我ながら呆れるほど有頂天になるやう」な原因が、ここでは十分説明されていない。ここでいう「やがて来る素晴らしい幸福一つ」は、川端の恋愛という背景がある。孤児として肉親を失っていた〈私〉が誰かと婚約することで、新しい家族（肉親）が得られるという期待がここには潜んでいる。漠然とした期待より具体的な希望がここには存在しているのである。

そんな時伯母の話聞いて〈私〉は記憶を総合・復元させ、それを通じて父母との絆も復元させる。〈私〉が総合・復元させたのは、油にかかわる〈私〉の記憶であるが、次にこれについて考えてみる。

三 媒介としての油

〈私〉の自己回復・自己浄化の可視的な証は油によって表れている。油臭いのに敏感で特に菜種油の臭いのする物がだめだった〈私〉が、菜種臭いものを食べられるようになったのであるが、

ここで「油」は単に〈私〉の変化の一例として挙げられたのではない。それは感情と記憶の問題ともかかわっている。

人間の現実認識は理性と感性によって成り立つが、中でも理性は記憶に多く頼っていると言えよう。しかし、記憶というものはいつも不完全なものでもある。記憶を失ったり、間違ったりする。記憶の喪失や誤りについてこのテキストには次のように書かれている。「父は私の三歳の時死に、翌年母が死んだので、両親のことは何一つ覚えてゐない」、「写真を見たつて何も思ひ出すことがないから、親しい人の噂といふ気が矢張りないので、直ぐ忘れてしまふ」、「従姉から聞いたやうな、父の葬式で家が賑かになつたのを私が喜んでゐたことや、また、棺に釘を打たせまいとしたことも、ちつとも覚えてゐない」など、父母に対する記憶の喪失を〈私〉は何回も語っている。そして、〈私〉は誤りがちな記憶についても語っている。幼い時反橋を渡つたやうな気がしたことは、「だつて、そんなはずがないぢやないの。三つや四つの子供はあふなかつて、とてもこの反橋の上り下りは出来やしなない。お父さんやお母さんに抱つこされてゐたんでせう。」と従姉に指摘され、その記憶の間違いが表れている。「蠟燭のはうは多分伯母が記憶の誤りか話の調子で誇張したのだらう」と、〈私〉の記憶を復元してくれた伯母の記憶の誤りも指摘している。次の文章には錯覚、もしくは脚色される記憶をよく表している。

「油を零したのは、あの木斛と向ひ合つた座敷の縁側の手洗鉢の横だつた。」なぞといふことまで思ひ出した。しかし考へると、父母の死んだのは大阪の近くの淀川べりの家だ。今思ひ描くのは淀川から四五里北の山村の家の縁先だ。父母が死ぬと間もなく淀川べりの家を毀して古里へ歸つたので、川べりの家のことは少しも覚えてゐないから、油を零したのも山の家らしく思はれるのだらう。それから、場所も手洗鉢の横とは限らないし、かはらげは私の手にあるよりも母や祖母が持つてゐるほうが自然である。また、父の時と母の時との二度が一度として、或は同じことの繰返しとしてしか思ひ浮べられない。細かいことは伯母も忘れてゐる。私が記憶と思ふものは多分空想なのだらう。しかし私の感情は却つてこの怪しいなり曲つたなりを真実として懐しみ、人聞きなのを忘れて自分の直接の記憶であるかのやうな親しみを感じてゐる。

科学的にも、人間の脳における忘却と錯覚は当り前のことのようにであるが、これらの記述から〈私〉が、その問題を気にしていることが分かる。結局記憶というものの不完全性を〈私〉は奥底で認識していたのである。が、それを仄めかしながらも、彼は伯母の話によって自分の記憶を紡ぎ出していく。父母に対する記憶は〈私〉にとって孤児根性の浄化にかかわっているからである。「顔も知らない父母の死のために流す涙は幼稚な感傷の遊戯なのだ」と思う裏側には、父母への記憶を回復したいという強い願望が潜んでいたと言えよう。父母について何一つ覚えていない〈私〉は伯母の話を通じて、血縁関係の復元できる記憶の破片を持っていたことを認識する。

先も述べたように、〈私〉の記憶の回復、自己回復の大きい要因は伯母の話であるが、中でも〈私〉に最も影響したのは、油の話である。「お父さんやお母さんが死んだ時には、無理を言つて困つた。仏の前で叩く鉦の音を大変嫌がつて、その音を聞くと泣きむづかるもんだから、鉦は叩かな

いことにしたんだよ。その上仏壇の灯明を消せと言ふんだもの。消すばかりでなしに、蝋燭を折つてしまふし、かはらけの油を庭に流してしまふまで、疔を鎮めないんだからね。お父さんの葬式にはお母さんが泣いて怒つてゐた。」という話である。これを聞いて〈私〉は自分のうちにある悲しみを知る。〈私〉は父母に対する記憶を失っていても、自分の体は父母の死を覚えていたことに気づく。

(前略) 今日まで私は油臭いのに敏感だつた。単純に油の臭ひが嫌ひのつもりでゐた。しかし、伯母の話聞いて初めて私は、このことのうちに含まれた私の悲しみを知ることが出来たのだつた。仏前の油の灯を嫌がつた私に父母の死は油の臭ひとして沁み込んでゐたのかもしれないのだ。

上の引用は、意識(言葉として)が覚えていないとしても、体(非言語)で父母の死の悲しみを覚えていたという〈私〉を発見したことである。この身体(感覚)の記憶によって〈私〉は、自分の中に存在する悲しみを認識するが、それは〈私〉が願望していた父母との絆を自覚することでもあった。もう「顔も知らない父母のために流す甘い涙は幼稚な感傷の遊戯なのだ」と思わなくても、「感情の因習や物語の模倣で悲しむものか」と意地を張らなくてもいい。自分の中にある悲しみを素直に認めることで、部分的ではあるが、父母との関係が回復できたのである。したがってこの発見は、〈私〉の「孤児根性」を浄化させる救いの一つでもあった。

ここで注目したいのは、意識より身体、理性より感覚がより本質的で根源的であるということである。記憶は失っていても、〈私〉の体は悲しみという感情を覚えていた。父母の死を理知(言葉)で受け入れられない幼い子供が、心身未分化の状態で、父母の死の悲しみを油臭いという匂いとして、体の奥底に覚えていたのである。体感覚としての嗅覚は言葉(記憶)を媒介することなく、その痕跡をとどめておいたとも言える。

精神医学者の足立博は、匂いについて『「匂い」の心理学』¹⁰⁾で次のように語っている。

ちなみに古語辞典をひもとけば、「愛し」と「悲し」が同じ「かなし」の項目におさめられている。「愛し」は「身にしみていとし、じんとするくらいいいらしい」。「悲し」は「身にしみてあわれだ、ひどく切ない、やるせなく悲しい」という意味である。古くはいずれも「可奈之」、「加奈之」などの同じ万葉仮名で書かれており、原義も同じ「身近な事物に対する深く切実な気持を表すのが原義」とされている。

ここで大切なことは、「対象が人間の場合は、主に肉親や男女の間の愛情や死や別離に伴う悲哀の情などを表す」とされていることである。「身にしみていとし」あるいは「身にしみてあわれだ」という言葉に示されているように、これは身体により深くむすびついた情感であるといえる。「愛し」も「悲し」もともに、お互いに身を寄せあうような、そこにふたりの匂いが通いあうような、身近な間柄での感情をあらわす言葉なのである。

愛と悲しみは、人間の感情の中で身体と深く結びついているということであり、その感情は身近な人間関係で起こるということでもある。事実、愛と悲しみは銅貨の両面のような関係で、愛があるからこ

10) 足立博『「匂い」の心理学』弘文堂、1995年5月、p102-103

そ悲しむのであり、愛がなければ悲しみもないだろう。上の文章はこの作品にも適用できる。『油』において、悲しみという感情は〈私〉の身体により深く結びついている。そして、その悲しみという感情は愛する父母を失った悲しみに他ならない。ここで〈私〉は自分の体に沁み込んだ悲しみを知り、さらにそこに含まれた父母への愛情をも認識できたのであろう。

そしてそれは感覚の世界、中でも匂いの世界と結びついて表れている。〈私〉の油嫌いは、次の文章によく表れている。

私は虚弱な父の体質を受けた上に月足らずで生れたので、生育の見込みがないやうに見えた。小学に通ふ頃まで米の飯を食べないやうな有様だつた。嫌ひな食物が多い中でも、菜種油の臭ひのする物を口に入れると、きまつて吐いた。小さい時鶏卵の焼いたのは落焼でも巻焼でも非常に好きだつたが、焼く時鍋に菜種油を引くことを思ふと、焼けてから臭ひがしなくても嫌だつた。鍋についてゐた表面をきつと祖母か女中かに剥かせてから食べた。食の進まない私のために、この面倒は毎日繰り返されてゐた。またある時、行灯の油が一滴沁みた着物をなんとではかれても二度と着ようとせず、そこを切り抜きつきを当てさせてから、やつと気味悪さうに手を通したことがあつた。

〈私〉は油が嫌いであるが、中でもその匂いに敏感であることが分かる。前述のように、父母の死を悲しむ感情、その言葉以前の記憶が他ならぬ「臭ひ」として現れているが、これは匂いの特性にもつながる。

一般的に視覚や聴覚は遠隔感覚とも呼ばれている。他方嗅覚は味覚と共に、接近感覚とも呼ばれている。前者は対象との距離を前提とするのに対し、後者は対象との接近を要請する。前者は対象を客観的に分析し、それを通じて感覚する主体と区別される。対象を客観的に捉えるのは、言語の分化、発達と共に視覚中心の文化を促進してきたとも言える。が、嗅覚は視覚に比べて未分化の感覚であり、非言語的感覚である。言語から最も遠いところにある嗅覚は、一方では、言葉として（したがって客観的に）、記憶することのきわめて困難な感覚でもあるが、他方、身心未分化の状態での、体感覚 (cenesthesie) としての嗅覚は、体の奥底に、言葉を媒介することなく記憶の痕跡をとどめることも可能である。

〈私〉が父母の死を（もしくはその悲しみを）匂いとして覚えていたことは、前言語的で非客観的な嗅覚の性格をより明らかに現している。幼い〈私〉がまだはっきり捉えられない父母の死とその悲しみは、その匂いになって〈私〉に沁み込んだ。したがってこの匂いは、〈私〉の感情と身体をつなぐものとして、〈私〉の体にずっと焼き付いていたのである。またこの匂いは〈私〉と父母をつなぐものでもある。〈私〉が何一つ覚えていない父母であったが、〈私〉の感覚は父母を覚えていた。油の匂いは父母の死を悲しむ〈私〉と父母を結びつける媒介なのである。さらに、その油は祖父や祖母にもかかわってくる。

父母の死の三四年後に祖母が死んだ時とか、またその三四年後に姉が死んだ時とか、そのほか、折々私を仏壇に礼拝させる度毎に、祖父は必ず灯心の灯を蠟燭につけ変へる習慣だつた。このことは伯母の話をするまで、なぜ祖父がさうするかとも訝らずに、ただその事柄として頭に残つ

てみた。私は何も生来釘の音とか油の灯とかが嫌いだつたのではあるまい。祖母や姉の葬式の時分には、父や母の葬式に油を捨てさせたことを忘れて、灯心の灯明でも平気でみたかもしれない。しかし、祖父は油の灯明を私に礼拝させはしなかつた。そして伯母の話聞いて初めて私は、このことのうちに含まれた祖父の悲しみを知ることが出来たのだつた。

(前略) また油嫌ひの我慢を許してくれた祖父母の気持ち、伯母の話から初めて想像出来たといふものだ。

これは灯明の油や菜種油の油に気を遣った祖父母の姿に、深い悲しみと愛情を見ている文章である。ここには、油嫌いとして身にしみた「私の悲しみ」、それを知っていた祖父母の悲しみ、そしてわが子の死を悲しむ親としての悲しみなどのいくつもの悲しみが重なっている。勿論愛もそれに比例する。

〈私〉の父母に対する愛、祖父母のわが子に対する愛、孫に対する愛など。

油嫌いとして自分の体に焼き付いた、父母への愛情と悲しみを認識し、祖父や祖母の愛情と悲しみをも〈私〉は認識する。したがって〈私〉は、記憶の喪失で失った父母との絆を回復し、その過程を通じて孤児根性という自己否定から自己肯定へと転換し、さらに自己浄化へ進むのである。肯定的自我の現れは、次のような文章から読みとれる。

こんな風に気持ちが移つて来た私には、伯母からの話を聞き、あれらのことを思ひ当つた瞬間が生きてみた。父母の死で受けた痛みの一つから忽然助かつたなど直覚したからだ。ために、菜種油臭いものを食べてみようと思ひ立つた。そして不思議に食べられるやうになつた。種油を買つて来て指先につけ、なめてみた。臭ひも敏感に鼻に来るが気にならなくなつた。

「この調子。この調子。」と私は叫ぶ。

この変化もいろんな風に考へられる。父母の死とはなんの関係もなく生来油が嫌いだつたのに、助かつたなど喜ぶ心が打ち勝つて、なんでもなくなつたとも言える。しかし、父母の死を悲しむ心がふと仏前の灯明に宿り、その油を庭に捨てたことから油を憎むやうになり、その因果関係を忘れながらも油を嫌がつてみたのが、父母の話で偶然原因と結果とが結びついたためだと、無理にも言ひたい。

父母の死の痛手として自分の身にしみた油嫌ひは、菜種油を受け入れることで癒される。そしてそれを父母との因果関係から解釈しようとする〈私〉は、すでに父母との関係を回復しているとも言える。それはさらに前向きに進んでいく。身体のため飲む油臭い肝油が、「飲むたびに、亡き肉親達の冥護が私の身に加はつてゐるやうな気さへする」し、「肉親達の仏前に油の御百灯を花々と献じてやりたい」と思うようになる。ここで油臭いものは、父母の不在の悲しみから肉親達の〈私〉に対する〈冥護〉に転ずる。今まで父母の死を嫌うと同時に嫌いだつた油の匂いが、逆に〈私〉に対する死者達の加護としての意味合いを持つに至るのである。

結論的に言うと、記憶を越える、前言語的な感覚としての匂いは、感情と身体、父母と私、祖父と私、過去と現在、さらに未来をもつなぐ媒介として使われている。

四 川端文学における匂いの世界

前章では、前言語的な記憶の表れである匂いについて述べた。この体感覚としての嗅覚は、体の奥底に、言葉を媒介することなく記憶の痕跡をとどめておいた。したがって論理性を欠くが、逆に強度において優れ、生き生きとしたものとして物事の本質を語っている。この作品では匂いの世界の、そのような働きが見事に表現されていると言える。

さらに感情と身体、父母と〈私〉をつなぐ媒介としての匂いの世界が描かれていることを先に指摘したが、そこには対象の客観化より対象との接触を必然とする、嗅覚の特性まで溶け込んでいると言える。このように『油』には匂いの世界が、作品の構造とも相通ずる形で、独特な作品世界として形成されていたのである。

が、この作品以外にも川端文学において匂いは独特な世界をなしている。それらは多様に豊かに描かれていて、そのすべてを語ることは容易ではないが、ここで簡単に触れてみる。

川端文学の主要作品として評価されている『抒情歌』は、亡き恋人に語りかけるとい^{にほひ}悲恋物語であるが、この作品にも匂いが深くかかわっている。冒頭の部分で「この部屋の香かいたします。この香は死んでゐるわ」とい^{にほひ}かけ、〈私〉（竜枝、筆者注）は四年前のあの夜のことを語る。

私は香水をつかつたことのない娘でありました。

覚えていらつしやいますか。もう四年前のあの夜、風呂のなかで突然はげしい香におそはれた私は、その香水の名は知らぬながらも、真裸でこのやうな強い香をかぐのは、たいへん恥かしいことだと思ふうちに、目がくらんで気が遠くなつたのでありました。それはちやうど、あなたが私を振り棄て、私に黙つて結婚なされ、新婚旅行のはじめての夜のホテルの白い寝床に、花嫁の香水をお撒きになつたのと、同じ時なのでありました。私はあなたが結婚なさるとは知りませんでしたけれども、後から思ひ合せてみますと、それは全く同じ時刻でありました。

あなたは新床に香水を撒きながら、ふと私にお詫びをなすつたのでせうか。この花嫁が私であつたらと、ふとお思ひになつたのでありませうか。（『抒情歌』）

これは、愛あるが故に可能な「愛のあかし」として、〈私〉の持っている超能力、すなわち第六感の一つである。〈私〉は四つか五つの頃、なにげなく取るかるたが当たる神童とも呼ばれたが、それは母に対する愛のしるしの遊戯であつた。弟の溺死を予知してそれを防いだり、母の死んだ同じ時刻に母が死の報せに来る幻想を見たりする。恋人の〈あなた〉が〈私〉を捨てたのも、二人の間にあまりに愛のあかしが満たされていたからである。「見たこともないあなたの家の応接間」は〈私〉の空想、そのままであり、「おなじ時におなじことを両方から書い」て、学校にいる〈あなた〉が食べたと思うものを家で〈私〉が料理したこともある。

上の部分は心霊学や超能力などを語る時よく引用される部分でもあるが、ここで注目したいのはその特異性である。透視や予知のような超能力が文学の中で使われていることを時々見ることはある。

しかし、遠く離れたところで匂いを嗅ぐということはめったに見られない。筆者はかたにこれを遠隔透嗅とでも言いたいのが、これこそ、川端の匂いに対する興味と関心が如実に現れているあかしであると思われる。

ここでは香水の匂いが、〈私〉と〈あなた〉をつなぐもの、もしくは一体化させるものとして働いていることが指摘できる。〈あなた〉が「花嫁の香水をお撒きになつた」同時に、空間を越えて〈私〉は激しい香水の香におそわれる。そして「目がくらんで気が遠くなつた」が、それは遠くにいる〈あなた〉に性的に感応した二重写しとして捉えてもいい。男女の間の性愛が「新床の香水」の中に潜んでいるからである。この瞬間〈私〉は〈あなた〉と一体化するが、それが遠隔透嗅という技法によって鮮明に表現されているのである。

また『抒情歌』には、父が炊いてくれた「中国の香」と四五十人の女の思い出の「悪臭」が比較されるなど、いくつも匂いに関する話が出ている。聖者がさまざまな香からさまざまな真理をさるといふ維摩経の衆香の国の話、霊の国の物質はみんな地上から立ち登る香で出来るというレイモンドの霊界通信¹¹⁾もそうである。そして「人間がさまざまな香からさまざまな真理をさるといふことも、ただ美しい象徴の歌とばかりは思はれません」とも〈私〉は語っている。死者に語りかけるという作品の特徴でもあるだろうが、中でも匂いに対する記述がよく用いられていることは、作者が匂いに敏感であり、同時にその表現にも相当な関心を持っていたことを表していると考えられる。そしてその匂いがより本質的なもの、超越的なものとしてよく用いられていることも意味深い。

川端が匂いについて関心を持っていることは『匂ふ娘』という作品からも顕著に感じられる。作品の題名がすでにその特性を語っているように、〈あみ子〉の体はほのかな匂いを発する。

光村が車の扉をあけて、あみ子が乗つて来る時に、あみ子の匂ひもはいつて来る。そして、その匂ひはすぐ車のなかにただよぶ。あみ子は十七歳の学生で、化粧はしてゐないし、香料も使つてゐないから、あみ子その人の匂ひだつた。髪は匂ひではなくて、からだの匂ひだつた。強い匂ひではないが、四季にかかはりなく、あみ子が車にはいつたとたん匂ふし、ほかの女がこのやうに匂ふのを光村は知らない。（『匂ふ娘』）

それは母譲りであるが、〈光村〉は彼女を抱く時、その匂いによって〈あみ子〉の女の高まりを感じ取り、〈光村〉の男は勢いづくのである。そして「匂ひをあらはす言葉は少くて、貧しくて、あみ子さんの匂ひも的確に現はせないけれども、何万人の女に一人の女の匂ひとは信じる」と、言葉で表現しきれない匂いの豊かな世界も描かれている。ここで〈あみ子〉の体の匂ひは、凄烈なエロチシズムを漂わせている。性的興奮を引き起こす、フェルモン (pheromone) については殊更に説明する必要もないだろう。また、文学作品の中で体臭という性的魅力に言及している例を散見することもある。けれども、体の匂ひ自体が作品を織り成す例は、古今東西にわたって珍しいと言わざるを得ない。匂ひ

11) 羽鳥徹哉「川端康成と心霊学」（『川端康成の基底』教育出版センター、1979年1月、p 294-p 335）にレイモンドの話の引用について詳しく指摘している。

に対する川端文学の特異性はこれによっても充分窺えるだろう。

『伊豆の帰』という作品にも女性の体臭について語った部分がある。「毎月一週間娘の体から特殊な体臭も感じる事が出来るのである。さういふ日は決して娘は彼の部屋へ顔を見せなかつた。廊下などで会ふと、彼が娘の秘密の匂ひを知つてゐることを承認した表情で頬を紅らめながら微笑するのだつた。」という文章がある。この表現は、女性の生理の匂ひまで嗅ぎ分ける嗅覚の敏感さを表すと共に、その匂ひに潜む官能の秘密をも表している。『千羽鶴』の〈太田夫人〉の官能に関しては、「温かい匂ひにむせぶやうな受身」、「匂ひに酔ふやうな夫人の触感」などで表されている。女体の匂ひの官能性を繊細に表現していると言えよう。

一方、官能的な女性の体臭とは対照的に、清らかな匂ひの、あるいは匂ひのしない女性も川端文学には度々登場する。前掲の『千羽鶴』の〈稲村ゆき子〉は、「ほのぼのと清らかなものが匂つて来る」女性であり、「令嬢の香気が匂つてゐるさうな気がして」、「令嬢の残り香を慕つて」などと、表現されている。『篝火』の〈みち子〉、『伊豆の帰』の〈りか子〉などは、「体臭の微塵もないやうな娘」、「体臭のない女のやうに」と描写されているが、これらは女性の純潔性、または無垢な女性像を象徴していると言ってもいいだろう。

そして人物の自意識が匂ひを通じて表れていることも川端文学では見られている。前掲の『匂ひを読む』には、神経症の発病と嗅覚とが深くかかわっていることが述べられている。嗅覚が鋭敏な人は特に鋭敏な神経を持っており、過敏な嗅覚の持ち主は神経症になりがちであるとも語っている。また近藤裕子が「匂ひとしての〈わたし〉——尾崎翠の述語的世界——」¹²⁾で「嗅覚には、そのとらえ所のなざゆえに、〈自己の病〉に絡みやすいという側面がある」と述べているが、匂ひは自己意識とも密接にかかわっているようである。川端の作品、奇怪な幻想の世界を描いた『片腕』でも、主人公〈私〉は自分の匂ひを気にしている。「匂ひね？ 僕の匂ひだらう。暗がりに僕の大きい影が薄まらんやう立つてゐやしないか。僕の影が僕の帰りを待つてゐたのかもしれない。」と〈私〉は言うが、この文章は「部屋にこもつてゐる私の孤独が私をおびやかすのだつた」という表現とかかわっている。それは「私の不潔で陰湿な孤独の匂ひ」という言葉に結びつくが、ここで匂ひは自意識の病を表している。それに対応している「泰山木」の匂ひは、純潔と情念の共存する〈片腕(娘)〉の象徴としても読み取れる¹³⁾。

12) 近藤裕子「匂ひとしての〈わたし〉——尾崎翠の述語的世界——」（『日本近代文学』57集、1997年10月、p92）

13) 『片腕』の解釈は拙稿「川端康成の『片腕』論」（『日本文化學報』2006年8月）を参考にさせていただきたい。

五 おわりに

以上『油』を中心に、川端文学における匂いの世界を考察してみた。『油』は〈私〉の記憶および血縁の絆を復元する自己回復の物語であり、自己浄化の物語である。そして、油の匂いは、思考という記憶以前の〈私〉の感情が身に沁み込んだ前言語的記憶であり、肉親達の愛と悲しみをとどめておくもの、その愛と悲しみを喚起させるものとして働いている。またそれは過去と現在を、孤児根性から自己肯定へ〈私〉をつなげる媒介としても働いていることを指摘した。このように、『油』は匂いの世界が、記憶を越える前言語的な感覚として、感情と身体、父母と〈私〉、祖父母と〈私〉、過去と現在、さらに未来をもつなぐ媒介として用いられていて、それが作品の内容と有機的に結ばれている作品なのである。したがって川端文学における匂いの世界について論じる際、最も重要な位置を占めていると言える。

『油』以外にも、愛情と超感覚、官能や純潔を表わす匂い、自意識を表わす匂いなど、川端文学には多様で豊かな匂いの世界が描かれていることも述べたとおりである。『抒情歌』『匂ふ娘』『伊豆の帰り』『千羽鶴』『片腕』などの作品で匂いの世界は豊かな美的感性と独特な世界をなしている。

作者自身は『油』について、「私の油嫌ひその他みなつくりごとである」と述べているが、これはそのまま川端の嗅覚の敏感さを物語っている。川端は匂いに敏感であったし、文学の中でも独特な匂いの世界を表出してきた。これは日本近代文学の中でも稀な成果である。川端文学は、感覚と身体を越えて、多様な美の世界や象徴の世界へまで漂い広がっていると充分言えよう。

抒情文学、視覚中心文学という今までの川端文学への評価は、この嗅覚という感覚を通じて、新しい可能性をも秘めているのではなかろうか。嗅覚的観点から川端文学を分析した所にもこの考察の意義があると思うが、記憶、もしくは理性を越えて、前言語的世界、もしくは根源的世界へつながっている川端文学の特質がこのような匂いの世界に浮んでくることも意味があるだろう。

川端文学における匂いの考察は始まったばかりである。視覚でも聴覚でもない、嗅覚としての匂いの世界は、これからその香りを少しずつ匂わせていこう。

【参考文献】

- 川端康成 (1980) 『川端康成全集第二巻』 p.61-70
- 近藤裕子 (1979) 「匂いとしての〈わたし〉—尾崎翠の述語的世界—」 「日本近代文学」 57集、p.92
- 羽鳥徹哉 (1979) 『川端康成の基底』 教育出版センター、p.141-162、p.294-335
- 林武志 (1982) 『感傷日本近代文学⑤川端康成』 角川書店、p.7-10、p.44-54
- 川端康成 (1982) 「あとがき」 『川端康成全集第三十三巻』 新潮社、p.293、p.295
- 森安理文 (1993) 「油—悲しみの追憶から哀しみへの変身」 『川端康成ほろびの文学』 国書刊行会、p.11-20
- 太田鈴子 (1995) 「川端康成の新感覚『油』 『葬式の名人』 『孤児の感情』 に関して」 「学苑」、p.52-60
- 足立博 (1995) 『「匂い」の心理学』 弘文堂、p.102-103
- 福田淳子 (1996) 「『油』論」 「川端文学への視界11」 教育出版センター、p.5-18
- 岡本和宣 (1996) 「川端康成—本文異同をめぐって」 「皇学館論叢」 p.19-36
- 吉本隆明 (1999) 『匂いを読む』 光芒社、p.43、p.44
- 金順熙 (2004) 「川端康成『油』論—記憶を作る物語—」 「川端文学への視界19」 銀の鈴社、p.8-20
- 俞載信 (2006) 「川端康成の『片腕』論—幻視の多重構造と感覚の世界を中心に—」 「韓国日本文化学報30輯」 p.265-284

要 旨

本稿は作品『油』を中心に、川端文学における匂いの世界を考察したものである。『油』は〈私〉の記憶および血縁の絆を復元する自己回復の物語であり、自己浄化の物語である。そして、油の匂いは、思考という記憶以前の〈私〉の感情が身に沁み込んだ前言語的記憶であり、肉親達の愛と悲しみをとどめておくもの、その愛と悲しみを喚起させるものとして働いている。またそれは過去と現在を、孤児根性から自己肯定へ〈私〉をつなげる媒介としても働いている。このように、『油』は匂いの世界が、記憶を越える前言語的な感覚として、感情と身体、父母と〈私〉、祖父母と〈私〉、過去と現在、さらに未来をもつなぐ媒介として用いられていて、それが作品の内容と有機的に結ばれている作品なのである。したがって川端文学における匂いの世界について論じる際、最も重要な位置を占めていると言える。

『油』以外にも、愛情と超感覚の世界、官能や純潔を表わす匂い、自意識を表わす匂いなど、川端文学には多様で豊かな匂いの世界が描かれている。『抒情歌』『匂ふ娘』『伊豆の帰り』『千羽鶴』『片腕』など、匂いの世界は豊かな美的感性と独特な世界をなしている。

作者自身は『油』について、「私の油嫌ひその他みなつくりごとである」と述べているが、これはそのまま川端の嗅覚の敏感さを物語っている。川端は匂いに敏感であったし、文学の中でも独特な匂いの世界を表出してきた。これは日本近代文学の中でも稀な成果である。川端文学は、感覚と身体を越えて、多様な美の世界や象徴の世界へまで漂い広がっていると言える。

キーワード：匂い、嗅覚、感覚、一体化、媒介、自己浄化、前言語的記憶、身体

투 고 : 2007.11.30

1차 심사 : 2007.12.08

2차 심사 : 2007.12.29

住 所 : (448-785) 경기도 용인시 수지구 풍덕천2동 삼성5차래미안 520동 706호

電 話 : 031-264-6707, 010-6413-9327

e-mail : jessiny@hanmail.net, jessiny0188@yahoo.co.jp